
とある昔話

暮乃りく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある昔話

【Zマーク】

N2167D

【作者名】

暮乃りく

【あらすじ】

今は昔の江戸時代。なんの変哲もない普通の男が夜道を歩いていた。頭によぎるのは幼い頃に聞いた怖い昔話。

(前書き)

この小説には、あえて会話文である「」を省いています。
少し読みづらいかも知れませんが、雰囲気を出したい演出と考えて
くれば嬉しいです。

今は昔の江戸時代。

夜というものは暗いもので、外灯なんかが今の時代にあるわけもなく、人々は各自提灯を持ち歩いたり果ては月明かり星明りで道を歩いたものだった。

明かりと言つてもほつりほつりとある小さな屋台だけ。

そんな真っ暗な道を一人の男が歩いていた。

男は根っからの小心者で気が弱かつたが、眞面目な性格だった。

そんなものだから、今日も本当はやるはずのない仕事を押し付けられ、こうして夜中に家路を歩くはめになってしまった。

まだ初夏の夜風は冷たい。

男は貧乏で提灯なんて高価なものは持つていなかつたから、月明かりを頼りに歩きなれた道を歩いていた。

少しばかり小走りなのは、子供の時に聞いた妖怪の話を思い出したからだ。

こんな時に限つて怖い話ばかり思い出す。

鼻歌でも歌えれば良いのだがそれすら恐ろしく感じて、男は黙りこくつたまま歩き続けた。

家に着くのはあともう少しだ。

と、ふと帰り道を急ぐ男の目に、道端に蹲つて座り込んでいる一人の女の姿が映りこんだ。

はて、なぜにこんな時間こんな場所に。

一本道を右に曲がれば長屋が並ぶが、ここは川沿いの道だ。

右手には大きい家屋敷の垣根がずっと遠くまで並んでおり、左手には草原と小さな小川がある。

酒場がどこかで酔いつぶれ、はたまた具合でも悪くなつて座り込んでしまったのだろうか。

男は放つておくのもどうかと思い、恐々女に近寄った。

女の肩は小さく上下に揺れているし、雰囲気は妖怪のものではない。
が…。

ここで昔話ののっぺらぼうが頭を過ぎつた。

まさにこんな光景での話だ。

その時の主役は酔っ払いだったようだが、立場や状況は非常に似ている。

月の明るいこんな夜の話だ。

男はぐくっと唾を飲み、一旦女に背を向けて、
が、また思い返して振り向く。

女は息が少し荒いようで座り込んだまま一向に動く気配がない。

本当に妖怪だつたらどうしよう。

いやいや、そんなわけがあるものか。あれは子供に夜出歩かせないための嘘話だ。

しかし実際に見たという話も聞いたことがあるような。

男は背を向けたり、また振り向いたりとしばらくうぶうぶしていたが、思い切って声をかけることにした。

本当に病氣か何かだつたら後味が悪い。

しかも朝一番の知らせで女が死んでいたなんて話になつたら…。

男はそつと近づいて女の肩を後ろからぽんぽん、とまるで腫れ物でも触るかのように叩いた。

震えているのがばれたら少し恥ずかしいが、構わず声もかけた。
もうし、具合でも悪いのか。

声も少し震えていたが案外落ち着いたものだった。

女はびくりと少し震えてから、ゆっくり振り向いた。

月明かりに少しづつ女の顔が照らされてゆく。

ああ…心優しい方…。

青白い月明かりに照らされた女は、真っ白な何もないのっぺりとした顔でこう言つた。

私の顔を知りませんか？

男は悲鳴をあげて一度しりもちをついたが、なんとか起き上がりて転がるよつに走つて逃げた。

腹の奥から出た悲鳴はしばらくそのまま、男は無我夢中で逃げた。

あの昔話は本当だつたのだ。

声なんかかけるんじやなかつた。

後悔と恐怖と混ぜこぜになりながら、男は家の方向も忘れて走りに走つた。

足が疲労に疲れだしてがくじと転ぶように道端に倒れこんだ。

まるで何百里と逃げたように足は痙攣し、力を入れようものなら入れたはしから抜けてゆく。

男は痛むわき腹と胸を抑えて、倒れこんだままゼエハアと息を切らしていた。

全身から湧き出る汗は冷たいが、走つたせいで体は熱い。しばらくの間そうしてから、男はまた恐々と振り返つた。

追いかけてきていたらどうしよう。

だが、女の姿はなく静かな夜道だけがそこにあつた。

男は安堵にまたがつくりと座り込んで、呆けたように辺りを見回した。

何もいない。

草原で鳴く虫の声が大きく聞こえる。

遠くには川のせせらぎ。

一体どこまで逃げ出して来てしまつたのか、男は気を取り直してきよろきよろと周りを見渡した。

大丈夫だ。まだ知つてゐる道だ。

ただ少し曲がる道を通り過ぎてしまつただけのようだつた。

男ははだけてしまつた着物を繕つて立ち上がり、気合でも入れるかのようにぱんぱんと腿を叩いた。震えはもうだいぶ収まつてゐる。

大丈夫、家まで歩ける。

男は再び月明かりを頼りに歩き出した。

あれは一体なんだつたのだろうか。

まだ胸はどうぞきとしているが、恐怖はほんのり薄れている。

仕事の疲れで見えた幻だろうか。

一瞬は本当にあつたのだと決め付け怯えたが、気を取り戻してみると幻だつたのではないかとさえ思えてくる。

だが、戻つてまで確かめる勇氣もない。

男はまっすぐに家に帰ることにした。

もういるわけがないと叫つ強がる自分と、またいたら怖いと怯える自分がいる。

男は怯える自分に従つて、だがそれでも幻覚を見たのだと思いながら歩いた。

そういえば、ふと思いつ出す。

昔話には続きがあった。

逃げた男は屋台で再び妖怪に出会いてしまうのだ。

男は薄れ掛けた恐怖心がじわじわと戻つてくるのを感じた。

口の中は乾ききつて、唾を飲み込むのが辛い。

だが…。

ここから家まではあと少しの距離だし、今まで屋台なんぞを見たことがなかつた。

出しても儲からないような道だ。

民家ばかりが続く道で屋台を出しても、誰も立ち寄りすらしないだらう。

男は安心して歩いていた。

お前さん、ちょっと顔が青いがどうかされたかね。

いきなり背後から声をかけられ、男はぎやつと飛び跳ねた。また妖怪か何かなのか。

振り向いたらそこには小さな小さな屋台が店を構えていた。

橙色の提灯が道を照らし、そこばかりが明るくて少し眩しい。

その屋台の中からは湯気があがっているのが見えた。

手前に簡単な鍋があり、そこから湯気が上がっているらしく。

そしてその奥には店主なのだろう、人の良さそうな老人と呼ぶにはまだ若い年老いた男がつっこりと人懐こい笑顔を浮かべていた。

ああ、物語の通りだ。

男は一步ずつ後ずさりをした。

年老いた男の笑顔がまた怖い。

おとつつかん、遅くなりましたなあ。

ふと物陰から若い綺麗な娘が顔を出した。

真っ白な顔にこれまで人懐こい笑みを浮かべた、小柄な女だった。橙色の提灯の明かりに、赤い着物が映える。

こんな物語ではなかつたな。

綺麗な娘の登場に男の緊張感が少し和らいだ。

まじまじと年老いた男と娘を見やる。

この人お客様さんですの？

娘がきょとんと店主に聞いた。

年老いた男は首を傾げ、男を見つめながら言った。

いいや、青い顔をしてもそもそも歩いていたからねえ。

何かあつたのかと思つて声をかけただけなんだよ。

娘は、はあと頷いて男につっこりと笑顔を見せた。

おとつつかんの作るおでんは自慢なんですよ。おひとついかがですか。

男は娘の笑顔に息を深く吐いて、氣の弱い緩んだ笑顔を返した。

そうしようかなあ。

のつぺらぼづに出くわしたことはずつかり忘れて、男は屋台でおでんと酒を頼んだ。

仕事の疲れもあつたのだろう、男はぐでんぐでんに酔っ払つてしまつた。

おでんも酒も美味しい」とこの「つねない。

次にこの屋台を見つけたときは、少ないが知り合いを連れて来ても良さそうだ。

男は気分をよくして、今日の仕事の愚痴や家の話を一人に話して聞かせた。

年老いた男と美人な娘の親子は、気を悪くするでもなくただただ笑顔で聞いていた。

時折相槌を打つたり、頷いたりするだけではあつたが、男は気分が満たされていくを感じた。

そこでふとさつきのことを思い出した。

笑い話にして聞かせれば少し娘の方の氣を引けるかもしない。

男はさつきののっぺらぼうの女の話を一人に聞かせた。

まるで子供のときに聞いた昔話のようだつた。

男は疲れで幻覚でも見たんだろうよ、と締めくくつた。

二人はくすくすと笑つて聞いていたが、店主がふと話を切り出した。それは確か最後が、こういう屋台でまたののっぺらぼうに会つてしまふんでしたな。

男はそうだそุดと笑つた。

だが実際はこうだ。

人のいい店主と綺麗な娘にこうして話を聞かせて終わりだ。

男は昔話がでつちあげなのだと、酒の入りもあつて熱く語つた。

あんなものは子供を怖がらせるための作り話なのだ。

でつちあげねえ：本当にそう思つかい？

がらりと店主の声が変わつて、男はまだ酔いの覚めやらぬ顔で店主を見た。

店主の笑顔が作り物のように見えてくる。

おいおいよしてくれよ。怖い思いはもう十分だ。

男は冷や汗を搔きながら、それでも強気に笑つて見せた。

心なしか娘の笑顔ですら作り物めいた仮面のように見える。

店主はそおつと両手で自分の顔を覆つた。

男はごくりと唾を飲んだ。

娘は相変わらず笑顔でこちらを見ている。

途端に静まりかえった屋台に、虫たちの鳴き声が響く。

のつぺらぼうひてのは、こいつのじやなかつたかい…？

店主がゆっくりと手を開いて見せた。

途端、男の顔が引きつった。

慌てて立ち上がり懐から小銭をありつたけ取り出し、投げつけるよ
うにして台に置く。

ち、馳走になつた：

消え入りそうなか細い声で男はそつまつと、今度は家路に向かつて
まつすぐに走つていつた。

転びそうになりながら走り去つて行く男の背中を見て、店主はおや
？と娘に振り返る。

俺は普通の顔をしていたよな？

くすくすと笑い出した娘に目と鼻はない。

のつぺらぼうのまま、口だけで笑つて言つた。
おとつつかん、田と口が逆についてますよ。

店主の男は、ふわつぱつぱつと噴出すように額にある口で大笑いした。
人間の顔は面倒くせえなあ。

月の綺麗な夜、屋台に年老いた男と若い女の楽しそうな笑い声がい
つまでも響いていた。

そんな妖怪たちの、笑い話。

(後書き)

昔話に出てくるお化けは、案外と陽気なものが多いで題材にしてみました。

今は陽気なお化けの話なんて滅多に聞きません。

忘れていた子供の頃の、ちょっと怖い昔話を思い出して頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2167d/>

とある昔話

2010年10月14日13時38分発行